

GRANDSLAM RECORDS 平林直哉氏 監修の復刻 CD シリーズ

クラシックレコード評論で名高い平林直哉氏が手がけるクラシック名演奏 CD 復刻シリーズをお届けできることになりました。 一枚¥2, 100均一（送料は6枚まで一律¥500）

SG2066 ムラヴィンスキー



ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー：

(1) 交響曲第5番 ホ短調、作品64

ボーナス・トラック

(2) 第3楽章 Valse, Allegro moderato

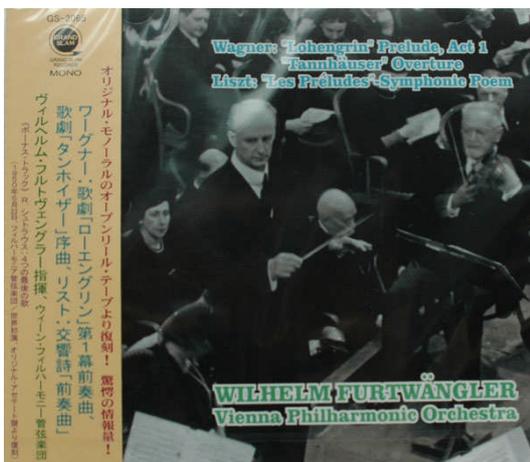
エフゲニー・ムラヴィンスキー指揮

(1) レニングラード・フィルハーモニー交響楽団

(2) モスクワ放送交響楽団

ムラヴィンスキーがこよなくあいたチャイコフスキーの交響曲第5番が遂に登場です。初期LPに刻まれた情報を忠実に再現すると同時に、ファンのご要望にこたえ一枚のディスクに収録いたしました。また、ボーナス・トラックの第3楽章（SP音源）は非常に珍しい録音で当ディスクが世界初のCD化となります。

SG2065 フルトヴェングラー



リヒャルト・ワーグナー：

(1) 歌劇「ローエングリン」第1幕への前奏曲

(2) 歌劇「タンホイザー」序曲

フランツ・リスト：(3) 交響詩「前奏曲」

R. シュトラウス：(4) 4つの最後の歌

(I 眠りにつくとき、II 9月、III 春、IV 夕映えに)

ウィルヘルム・フルトヴェングラー（指揮）

(1) (2) (3) ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(4) フィルハーモニア管弦楽団

録音：(1) 1954年3月4、5日、(2) 1952年12月2、3日、(3) 1954年3月3、4日 以上、ウィーン、ムジーク・フェラインザール、(4) 1950年5月22日、ロンドン、ロイヤル・アルバート・ホール

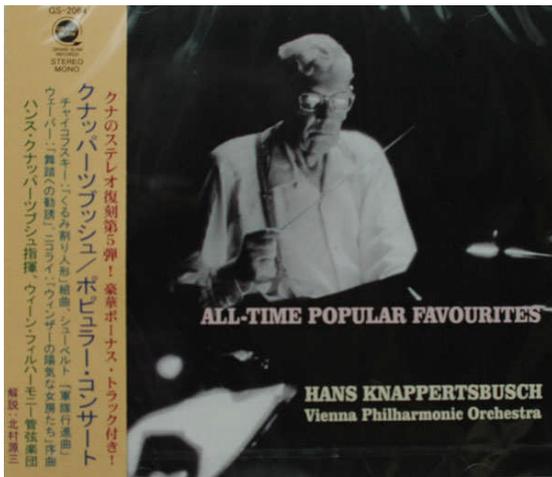
使用音源：(1) (2) (3) HMV (U. K.) HTA-16 (オープンリール・テープ、2トラック、19センチ) (4) アセテート盤 (番号なし) / 録音方式：モノラル ((1) (2) (3) セッション、(4) ライヴ)

ステレオ初期時代、英 HMV から発売されたフルトヴェングラーのオリジナル・モノラルのオープンリール・テープはカタログ数が限られているだけでなく、中古市場でも極めて稀少です。ところが、今年に入ってその幻のテープを初めて入手、その再生音に驚愕しました。従って、わずか3曲ではありますが、ノイズ・リダクションを使用しないテープの音がいかに生々しいか、それを実感していただくために急きょ発売を決定しました。

ボーナス・トラックについて

1950年5月22日、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールで行われた R. シュトラウスの「4つの最後の歌」の世界初演は、これまでいくつかのレーベルで発売されています。元となるアセテート盤には2箇所(〈眠りにつくとき〉の最終和音、〈夕映えに〉の最後7小節)に欠落があり、さらに第3曲目〈春〉にのみ拍手が入っていますが、既存のすべてのLP、CD はこうした欠落を補修するとともに、拍手の位置を入れ替えたり追加したりして、当日の雰囲気再現しようとしています。しかし、当ディスクではオリジナルのアセテート盤に記録された音を「全く修正せず、あるがまま」復刻いたしました。

SG2064 クナッパーツブッシュ



(1) チャイコフスキー：

「くるみ割り人形」組曲、作品71 a

(2) シューベルト (ヴェニンガー編)：

軍隊行進曲、作品51 の1

(3) ウェーバー (ベルリオーズ編)：

舞踏への勧誘、作品56

(4) オットー・ニコライ：歌劇「ウィンザーの陽気な女房たち」序曲

(5) グリンカ：歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

(6) ロッシニー：歌劇「ウィリアム・テル」序曲

(7) リヒャルト・シュトラウス：

交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」、作品28 ハンス・クナッパーツブッシュ (指揮)

(1)-(4) ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(5) オデオン大交響楽団

(6) ミュンヘン国立歌劇場管弦楽団

(7)ベルリン国立歌劇場管弦楽団

クナッパーツブッシュのステレオ復刻第5弾は「ポピュラー・コンサート」！豪華ボーナス・トラック付き

録音：(1)-(4)1960年2月15日-17日、ウィーン、ゾフィエンザール(ステレオ)、(5)1933年4月21日、(6)1928年12月、(7)1928年9月4日、5日モノラル)

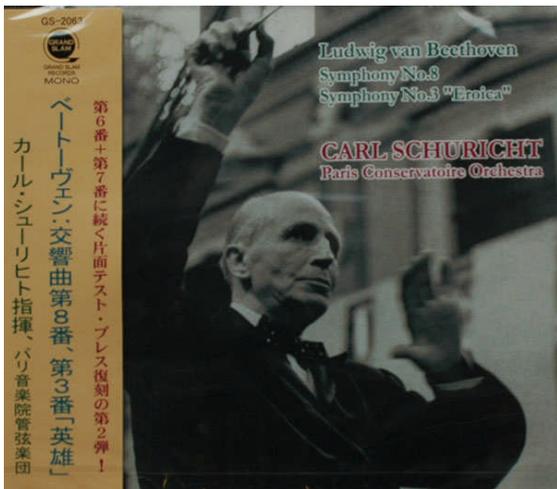
使用音源：(1)-(4)Decca (U.K.) SXL 2239, (5)Odeon (Germany) O 11875 (Be 10316/7) (6)Homocord (Germany) 4-8942 (M 52604/5) (7)Odeon (Germany) O 6772/3 (XXB 8162/8163/8164/8165-2)

クナッパーツブッシュのステレオ復刻第5弾は「ポピュラー・コンサート」で、これは英デッカの初期LPからの復刻です。いつものように初期LPに刻まれた情報を最忠実に再現します。また、ボーナス・トラックにはSP時代の怪演奏を収録します。超スロー・テンポの「ルスランとリュドミラ」、とぼけた味わいの「ウィリアム・テル」、そして途中でオーケストラがメチャクチャになる「ティル」など、クナの個性が強烈です。

解説書の内容

元NHK交響楽団の首席トランペット奏者、北村源三氏はウィーンに留学している時、クナッパーツブッシュ指揮、ウィーン・フィルの演奏に接しています。その時の模様や、カラヤン、クリップス、バームなどの思い出を存分に語っていただいています。その当時のウィーンの空気がよく伝わってくる貴重な証言です。

GS 2063 カール・シューリヒト



シューリヒトのベートーヴェン、テスト・プレスLPの復刻第2弾は交響曲第8番&第3番「英雄」

(1)ベートーヴェン：交響曲第8番 へ長調 作品93

(2)ベートーヴェン：交響曲第3番「英雄」変ホ長調 作品55

ボーナス・トラック

(3)ベートーヴェン：交響曲第8番～第1楽章 (オリジナルFALP 572/第1楽章251～252小節に欠落あり)

カール・シューリヒト(指揮)、パリ音楽院管弦楽団

録音：(1)(3)1957年5月7、10日、(2)1957年12月18、20、23日、パリ、サル・ワグラム/モノラル

使用音源：EMI (France) (1)(3)FALP 572, (2)FALP 574 (片面テスト・プレス)

2010年に発売したシューリヒト指揮、パリ音楽院管弦楽団の片面テスト・プレスLP復刻、ベートーヴェンの交響曲第6番「田園」&第7番(GS-2045)は非常に好評でしたが、今回はその第2弾である交響曲第8番&第3番「英雄」です。

前回と同じ説明になりますが、このテスト・プレスはマスターが完成したあとに一番はじめにカットされたものであり、しかも片面が未収録のために平面になっています。従って、原理的には最も新鮮であり、かつ安定した再生音を得られます。

交響曲第8番はフランス、イギリスで初発売された際、第1楽章に欠落が含まれたままでした。これはその後修正されて再発売されました。その歴史的事実を記録しておくために、この欠落をあえて付録としました。解説書にはシューリヒトの数少ない貴重なインタビューの中から、このベートーヴェンのセッションに関する部分を抜粋して掲載します。

GS 2061 ブルーノ・ワルター



ワルターのブラームス全集の第2弾！マックルーアの解説は、いよいよ核心部分に触れます！

ヨハネス・ブラームス：

(1)交響曲第3番 へ長調 作品90

(2)交響曲第2番 ニ長調 作品73

ブルーノ・ワルター（指揮） コロンビア交響楽団

録音：(1)1960年1月11日、14日、(2)1960年1月27日、30日、以上、アメリカン・リージュン・ホール、ステレオ、セッション オープンリール・テープ復刻

使用音源：Columbia (U.S.A.) (1)MQ 323, (2)MQ 371 (オープンリール・テープ、19センチ、4トラック)

ワルター& コロンビア響によるブラームス交響曲全集の第2弾です。復刻に使用した素材は前回同様19センチ、4トラックのオープンリール・テープです。テープ・ヒスは多少ありますが、原テープに記録された瑞々しい音を忠実に復刻しています。

前回の交響曲第1番ほか (GS 2060) に続き、当時のプロデューサーであったマックルーアの手記「ブルーノ・ワルターのリハーサル～その教訓と喜びと」(その2)を掲載します。(その1)ではワルターの出会いから最初の録音セッションが開始された経過に触れられていますが、今回は実際の録音現場の様子が記されており、いよいよ核心部分へと迫ります。いずれにせよ(その1)と(その2)をあわせて読んでいただければ、この文章がワルターの芸術とその人間性を見事に浮き彫りにしていることが実感されると思います。

GS 2060 ブルーノ・ワルター



ブラームス： (1)交響曲第1番 へ短調 作品68

(第2楽章のヴァイオリン・ソロ：イスラエル・ベーカー)

(2)大学祝典序曲 作品 80

(3)悲劇的序曲 作品 81 ブルーノ・ワルター(指揮) コロンビア交響楽団

ワルター&コロンビア響のブラームス交響曲全集第1弾、マックルーアの解説とともに蘇る

録音：(1) 1959年11月25日、(2) 1960年1月16日、(3) 1960年1月8日、カリフォルニア、アメリカン・リージョン・ホール、ステレオ

使用音源：Columbia(U.S.A.) (1)(2) MQ 337、(3) MQ 373 (オープンリール・テープ、19センチ、4トラック)

GS レーベルでは、いよいよワルター指揮コロンビア交響楽団によるブラームスの交響曲全集を発売します。復刻の素材はすべて19センチ、4トラックのオープンリールで、豊かな空間的広がりを持つテープの音質を忠実に再現します。ワルターのステレオ録音の立て役者のひとりに、プロデューサーのジョン・マックルーアがいます。彼はアメリカ「ハイ・フィデリティ」誌の1964年1月号にワルターの追悼記事を寄稿していますが、これにはワルターとの出会い、理想的な録音会場探しと優秀な楽団員の確保、一番最初のセッションへの不安、録音現場の雰囲気と音楽作りの方法、ワルターの人間性などが実に克明に記されています。これはワルターを知るためには最も重要な文献のひとつであり、ワルターの演奏と同等の価値を持つと言っても過言ではありません。このマックルーアの記事「ブルーノ・ワルターのリハーサル―その教訓と喜びと」は1964年3月に発売されたハイドンの交響曲第88番「V字」、同第100番「軍隊」のLP(日本コロムビア OS-307)のジャケットに全文の邦訳が掲載されていましたが、このCDを制作するにあたり著者マックルーアおよび訳者掛下栄一郎の両氏の許諾を得て転載します。なお、この交響曲第1番(GS-2060)ではワルターの出会いから最初のセッションまでの部分を掲載し、後半部分は交響曲第2番+第3番(GS-2061 発売予定)に掲載します。また、マックルーア氏によると、交響曲第1番の第2楽章のヴァイオリン・ソロは、ハイフェッツとの室内楽の録音でも知られる名手イスラエル・ベーカーとのことで、それを明記したディスクは恐らく初めてのことと思われま

SG5059 エフゲニー・ムラヴィンスキー



チャイコフスキー：交響曲第4番 へ短調 作品 36 エフゲニー・ムラヴィンスキー (指揮)

レニングラード・フィルハーモニー管弦楽団

不滅の名盤が 初期LPより蘇る!後期3大交響曲集の第1弾はムラヴィンスキーのチャイコフスキー第4!

録音：1960年9月14日、15日、ロンドン、ウェンブリー・タウン・ホール/使用音源：Deutsche Grammophon (Germany) SLPM 138657(LP)/ステレオ

ムラヴィンスキーとレニングラード・フィルが1960年秋、ヨーロッパでの演奏旅行中に収録したチャイコフスキーの後期3大交響曲は、あまりにも有名な演奏です。当レーベルではいよいよその第1弾、交響曲第4番に着手します。これは初期LPからの復刻となりますが、いつもの通り初期盤に刻まれた情報を限りなく忠実に復刻しています。なお、当

レーベルでは残りの 2 曲も発売を予定していますが、1 曲ずつ CD1 枚に収録し、既存の CD のように 2 枚の CD に分かれなようにします。ムラヴィンスキーのチャイコフスキー第 4 番の総ざらい、この第 4 番と同時に収録されたロジェストヴェンスキーらの録音スケジュール、さらにはムラヴィンスキーの幻の日本公演プログラム(1958 年)など貴重な資料を掲載します。

GS 2057 ヤッシャ・ハイフェッツ



(1)メンデルスゾーン:ヴァイオリン協奏曲 ホ短調、作品 64

(2)ベートーヴェン:ヴァイオリン協奏曲 ニ長調、作品 61 ヤッシャ・ハイフェッツ(ヴァイオリン)

シャルル・ミュンシュ指揮 ポストン交響楽団

Grand Slam 初の器楽奏者の復刻はハイフェッツ!不滅の名演がオープンリールより蘇る!

録音:(1)1959 年 1 月 23 日、25、シカゴ、オーケストラ・ホール (2)1955 年 11 月 27 日、28 日、ボストン、シンフォニー・ホール

使用音源:RCA (U. S. A.)(1)FTC 2046 (19 センチ、4 トラック、オープンリール・テープ) (2)FCS 24 (19 センチ、2 トラック、オープンリール・テープ) /ステレオ

GS レーベル初の器楽奏者の復刻は、ヴァイオリンの王者ヤッシャ・ハイフェッツです。使用した素材は 1950 年代から 60 年代に発売されたオープンリールで、その音は既存の CD 等とは印象が大きく異なります。残念ながらメンデルスゾーンの方は普及型の 4 トラックでしか発売の実績がなく、このテープからのリマスターとなりますが、それでもその情報量の多さは十分に実感出来ます。ベートーヴェンの方はメンデルスゾーンよりも 4 年前の録音ですが、2 トラックのテープを使用しているため、より密度の濃い、柔らかく繊細な音色で再現されます。

これらの LP が発売された頃の雑誌の批評を一部引用します。また、ハイフェッツの珍しい写真も掲載します。

ハイフェッツによるチャイコフスキー、ブラームスのヴァイオリン協奏曲(RCA、ステレオ録音)も近々発売を予定しています。この 2 曲はともに 19 センチ、2 トラックのオープンリール・テープからの復刻です。(注: 古いテープより復刻しており、わずかな音揺れや細かいノイズが混入しています。)

GS 2054 レナード・バーンスタイン



ショスタコーヴィチ：交響曲第5番ニ短調 作品 47 レナード・バーンスタイン指揮

ニューヨーク・フィルハーモニック

2010年10月歿後20年のバーンスタイン、作曲家から絶賛されたバーンスタインのショスタコ「革命」、オープンリール・テープより鮮やかに蘇る！

録音：1959年10月20日、ボストン、シンフォニー・ホール

使用音源：コロムビア(U.S.A.) MQ375(オープンリール・テープ、19センチ、4トラック)。ステレオ、限定盤

1959年8月、バーンスタインとニューヨーク・フィルは約8週間に渡るヨーロッパ・ツアーに出かけました。その途次である9月11日、モスクワで演奏されショスタコーヴィチの交響曲第5番は作曲家自身から大絶賛され、このニュースはたちまち全米を駆けめぐりました。10月に帰国した指揮者とオーケストラは、その熱狂と興奮をそのままに、わずか1日でのこのディスクの演奏をセッション収録しました。演奏そのものは、とてもセッションとは思えないほど燃え燃えたものですが、このディスクではその雰囲気は驚くほど生々しく再現されています。また、このディスクとほぼ同時に、上記のツアー途中で行われた8月16日のザルトツブルク公演がオルフェオより発売されますが、それとの比較も興味が尽きないでしょう。

大のバーンスタイン・ファンで知られるスポーツ・ライター、小説家の玉木正之さんに、バーンスタインとこの演奏に対する思いをたっぷり書いていただきました。

GS 2053 アルトゥーロ・トスカニーニ



(1)ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 作品 68

(2)ムソルグスキー(ラヴェル編)：組曲「展覧会の絵」 アルトゥーロ・トスカニーニ(指揮) NBC交響楽団

トスカニーニの既成概念を打ち砕く音!オリジナル・モノラルのオープンリールより復刻!

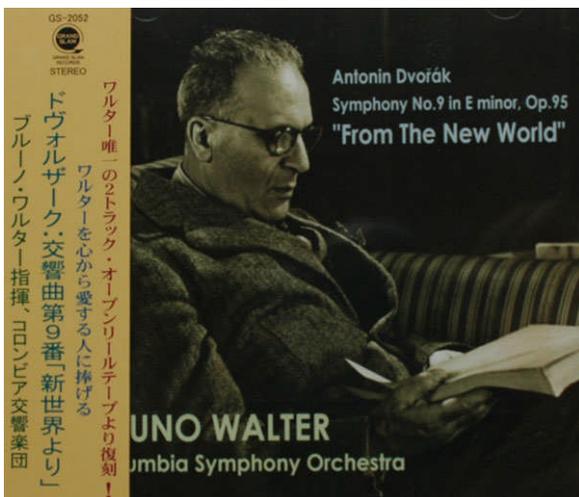
録音：(1) 1951年11月6日、カーネギー・ホール(モノラル)(2) 1953年1月26日、カーネギー・ホール(モノラル)

使用音源：RCA(U.S.A.) (1) CC-8, (2) CC-16(2トラック、19センチ、オープンリールテープ)

1950年代、トスカニーニのオリジナル・モノラルによるオープンリールテープはわずか数点しか発売されませんでした。これらはすべてセミ・プロ仕様の2トラック・テープですが、これが予想を完全に超えた音です。演奏者の汗や松ヤニが飛び散り、床は激しく振動し、シンバルの細かな破片さえ目に見えるほどです。オリジナル・マスターからのCDが多数発売されている状況においては、こうした古いテープからの復刻盤は原理的に言えば必要のないものと言えます。しかし、このディスクのように最低限の加工しかしていない音は、過去に出た物と大きく印象が異なります。いずれにせよ、文句を言うのであれば、一度は聴いてからにして欲しいものです。

トスカニーニに対する個人的な思い出を、制作者自身が記しています。また、珍しい写真も掲載します。

GS 2052 ブルーノ・ワルター



ドヴォルザーク：交響曲第9番ホ短調 作品 95 「新世界より」 ブルーノ・ワルター(指揮) コロンビア交響楽団

ワルター唯一の2トラック・オープンリールより復刻!かつてないほどの圧倒的な情報量!

録音：1959年2月14日、16日、20日、アメリカン・リージュン・ホール、カリフォルニア

使用音源：Columbia(U.S.A.)LMB 59(オープンリールテープ/2トラック、19センチ)、録音方式：ステレオ(セッション)
ステレオ初期時代、ワルターのオープンリールテープはある程度カタログが揃っていましたが、それらのほとんどすべては普及型の4トラック、19センチのものでした。その中でこの「新世界より」は唯一のセミ・プロ仕様の2トラック、19センチで、まれにオークション等に出ると争奪戦になる希少品です。しかし、希少性もさることながら、より安定感のある2トラック・テープの音は格別で、その情報量の豊かさは破格です。この「新世界より」はワルターのステレオ録音の中でも地味な存在ですが、この音で聴けば評価が大きく変わることが予想されます。とにかく、一度耳にして欲しいものです。ワルター存命当時に書かれた文献で、ステレオ・セッションの様子を伝える部分を邦訳して掲載します。たいへんに貴重な資料です。

GS 2051 ポール・パレー



パレー/フランス管弦楽曲集

ビゼー: (1)「カルメン」組曲

(1. 前奏曲 2. 衛兵の交代 3. アルカラの竜騎兵 4. 間奏曲 5. アララゴネーズ 6. 闘牛士)

(2)「アルルの女」組曲第1番(1. 前奏曲 2. メヌエット 3. アダージェット 4. 鐘)

(3)シャブリエ:気まぐれなブルー

(4)ラヴェル:マ・メール・ロワ

(1. 眠りの森の美女のパヴァーヌ 2. おやゆび小僧

3. パゴダの女王レドネット 4. 美女と野獣の対話 5. 妖精の庭)

(5)ドビュッシー:イベリア(管弦楽のための「映像」第2曲)

(1. 街々にて 2. 夜の匂い 3. 祭りの朝) ポール・パレー(指) デトロイト交響楽団

驚異の鮮明度! 2トラック・オープンリールテープからの復刻!

録音:(1)(2)1956年11月8日、デトロイト、フォード・オーディトリウム、(3)(4)1957年3月19日、デトロイト、フォード・オーディトリウム、(5)1955年12月3日、デトロイト、旧オーケストラ・ホール。 ステレオ

使用音源:(1)(2)Mercury (U. S. A.)MDS5-3, (3)(4)MS5-22, (5)MBS5-8 (オープンリールテープ/19センチ、2トラック)

モントゥーの「春の祭典」「火の鳥」(GS-2049)は「驚くほど鮮明」との評価を得ましたが、このディスクはそれと同じく19センチ、2トラックのオープンリールテープを復刻の素材として使用しています。2トラックのテープは高音質でしたが、発売されたカタログ数は少なく、たいへんに希少です。その中からパレー得意のフランス管弦楽曲集を集めました。とにかく聴いてみて下さい、この鮮明度は破格です!

GS 2050 ヤッシャ・ハイフェッツ



(1) チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35

(2) ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品77

ヤッシャ・ハイフェッツ (Vc)、フリッツ・ライナー指揮、シカゴ交響楽団
メンデルスゾーン、ベートーヴェンに続くハイフェッツのテープ復刻版第二弾です。
今回は二曲共セミ・プロ仕様のオープン・リール・テープより復刻しています。
ライナーノートには漆原朝子氏の「ファイフェツのこと」が掲載されています。
ヴァイオリニストならではの興味深い内容です。

GS 2049 ピエール・モントゥー



ストラヴィンスキー：(1) バレエ音楽「春の祭典」(2) 組曲「火の鳥」

ピエール・モントゥー(指揮)パリ音楽院管弦楽団

1956年のステレオとは信じがたい鮮明な音! ストラヴィンスキーの権威、モントゥーの名演を2トラックのオープンリールテープより復刻!

録音：(1) 1956年11月2日、5日、6日、11日、パリ、サル・ワグラム、(2) 1956年10月29日、30日、11月10日、パリ、サル・ワグラム。使用音源：RCA (U.S.A.) (1) ECS 67, (2) BCS 88 (以上、19センチ2トラック・オープンリールテープ) 【ステレオ(セッション)】、限定盤

これらの音源はアメリカ RCA とイギリス・デッカが業務提携していた時代の録音で、現在はデッカ原盤として広く知られているものです。復刻に使用したのは2トラックのオープンリールテープです。家庭用のオープンリールテープは毎秒19センチの速度で、トラック数はカセット・テープと同じく4トラックのものが一般的でした。しかし、主に放送局などのプロ・ユースとして19センチ、2トラックのテープも発売されていました。この2トラックは単純に言えば4トラックの倍のテープ幅に信号が記録されているため、音質はいっそうオリジナル・マスターに近いものです。マニア向けゆえにカタログもごく限られており、しかもステレオ初期にのみに少数しか生産されなかったため、今日でもこの2トラックのテープは中古市場でも高額で取引されています。最初期のステレオ録音の貴重なテープから出てくる音は信じがたいほど鮮明で瑞々しいものです。

木幡一誠氏による翻訳・解説は貴重な資料です。まず、モントゥーは「春の祭典」の初演を行った指揮者としてはあまりにも有名ですが、そのモントゥーは、実はこの「春の祭典」を好きではなかったとの証言を紹介しています。また、組曲「火の鳥」は従来から「1919年版」と表記されていますが、実際はモントゥーが独自に改変したもので、その点についても詳述しています。復刻に使用したテープは発売から半世紀以上も経過しているため、音揺れやドロップ・アウトなどが含まれます。ご了承下さい。



ブルックナー：交響曲 第5番 変ロ長調（改訂版） ハンス・クナッパーツブッシュ（指揮）

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

録音：1956年6月3-6日、ウィーン、ゾフィエンザール、使用音源：London (U. S. A.) LCL 80103（オープンリールテープ/19センチ、4トラック）、録音方式：ステレオ

GS レーベルでは今回から音源によりオープンリールテープの復刻も開始します。その第1弾はクナッパーツブッシュ指揮、ウィーン・フィルによるブルックナーの交響曲第5番、1956年、英デッカのステレオ録音です。オープンリールテープはLPとは違い基本的にプチパチ・ノイズはなく、内周の歪みもありません。空間的な再現能力はLPよりも上回っていると言われ、今でも一部には熱烈なオープンリール・ファンが存在します。

この演奏は悪名高い改訂版を使用しているため、昨今の原典版ブームに押されてか、近年では過去の遺物のように扱われる傾向がなきにしもあらず。

しかし、このオープンリールテープから復刻した太くて柔らかく、かつ非常に艶やかな音質で聴けば、クナッパーツブッシュの演奏は版の良し悪しを完全に超えた域にあることが再認識されるでしょう。

「なぜ、オープンリールテープからの復刻なのか?」、テープからの復刻に至った制作者による手記を掲載します。その他、クナの珍しいプログラムも掲載します。

=====